

映画のロケ地を訪ねて 『高崎グラフィティ』編

山河が織りなす風景が絵になる街

●高崎がまるごと舞台

高崎映画祭のクロージング上映作品『高崎グラフィティ』は、川島直人監督の長編映画監督デビュー作。8月18日より全国に先駆けて高崎で公開される。



8月18日より公開される映画「高崎グラフィティ。」

高校を卒業したばかりの男女5人が、これから踏み出す未来に夢と不安をにじませながら、一つの出来事を通して本音をぶつけ合いきずなを深めていく青春群像が、高崎を舞台に繰り広げられる。撮影スタッフの武井俊幸さん

が高崎出身ということもあり、ロケ地の選択が素晴らしい。高崎は、山河が織りなす風景が輝く街だと納得する。

●高崎市街を一望する別天地

夕日に向かって走ったり、海に向かって叫んだり、青春のほとばしる感情を炸裂させるのにふさわしい場所といったら……スクリーンに映し出された風景が印象に残り、久しぶりに足を運んだ。

高崎市街地の建物がレゴブロックのような立体感をもつて眼下に見える。遠くには赤城山を中心に、日光連山、武尊山、谷川岳、榛名山などの山並みが一枚の絵のように広がる。標高190m、観音山の山頂駐車場からの眺望である。

高崎駅から約4・5km、車で約12分。たったそれだけの移動で、野鳥が絶えずさえずり、夏はつつそうとした緑が谷から涼風を運んでくる別天地に到着する。何をいまさらという声も聞こえてきそうだが、観音山丘陵は、つくづく高崎の宝だと思う。

●遠くの観光地より観音山

観音山エリアには、白衣大観音・慈眼院をはじめ、808年に坂上田村麻呂が京都の清水観音を勧請したと伝わる清水寺。斬新な遊具が設置された親子連れに人気のケルナー広場やプール。神秘的な法悦の世界が広がる洞窟観音、旅情あふれる温泉宿の「錦山荘」。全国にも例を見ない「高崎市染料植物園」。そして、そこをめぐって

訪れる人が絶えないという人気の慈眼院のカフェや手打ち蕎麦処などもあって、遠くに出かけなくても、リフレッシュしながら、特別な一日を過ごすことができる。

●観音様のおひざ元の味 “ひっぱたき”

なかでも外せないのが、観音様のおひざ元にある参道商店街。昭和11年(1936)に観音様が建立されて以来、30店舗ほどが出店したが、現在は21店舗に減ってしまった。それでも各店舗は、観光客が気軽に寄れるよう入口の戸を開放している。扇風機が回る畳のお座敷、窓辺の風鈴が懐かしく響き、どの店も総じて「おはあちゃん家」のような懐かしさが漂う。

山頂駐車場の前にある「小松屋」のご主人小松清さんは、「観音様が建立された翌年に、母がここに店を出したのが始まりで、もう80年になる。昔は桜の時期になると、聖石橋が駅からやって来る花見客でごったがえし、子どもだった私は、「サを上げた花見客から空き瓶を回収して小遣い稼ぎをしたものだよ」と振り返る。

みそおでんを注文すると、「ひっぱたき」という別名があると教えてくれた。湯切りをするため、布巾でこんにやくをたたかことから付いたという。各店舗には自慢の甘じょっぱいみそダレがあり、こんにやくとの相性は抜群。観音山の素朴な味として、たまに思い出して食べたくなりそうだ。

